

上川【名寄市】

いとう みわこ
伊藤 美和子さん 株式会社エフエムなよろ (Airてっし) 局長

1966年生まれ、天塩町出身。天塩高校、名寄女子短大と進み、中川町職員となる。役場には23年間勤務し、43歳になる直前の2009年2月、株式会社エフエムなよろの社員に転職。2011年4月から局長。放送局の愛称「Airてっし」は、名寄市を流れる天塩川が由来。



「おそぎの花」、夢を叶えて地域に寄りそう情報を発信中

きっかけ

マイクに向かってしゃべることをやってみたくて最初に思ったのは中学生の時。手を挙げて放送委員になりました。この中学時代が原点だと思います。中川町に勤めて20年過ぎた2006年に、ラジオ局が名寄市にできると知って「なんて素敵なこと!」と思いました。開局2年目の社員募集に、ものは試しと履歴書を持っていったところ、「まずはボランティアで」と録音で番組を持たせてくれました。約1年後の社員募集の時に「もし気持ちが変わってなければ」と誘っていただき、「もちろん変わっていません!」と即答しました。

苦労

局長を任されて5年になります。自分の力不足を感じる時もありますが、人との出会いがあり、取材や営業先、市民パーソナリティーの方々や知り合いが増えていくことで、人からエネルギーをもらっていると感じます。隣の家まで100mという酪農地帯で生まれ育ったので、自分自身を人見知りかと思っていましたが、逆に人好きだったのかもしれない。「私なんか平凡な人生よ」と言うおばあさんが実は波乱万丈な生き方だったりするなど、人とおしゃべりすることで、私がかよくよしていることはちっぽけなことだな、と元気をもらっています。

満足度

2015年4月にスタジオを名寄市民文化センター(エンレイホール)に移転し、同時に施設全体の管理も受託することになりました。同年秋からは月刊のフリーペーパーも創刊し、現在、ラジオ放送、ホール管理、情報誌発行が3つの大きな柱です。開局当時2人だった社員が今は8人。放送を支えてくれている市民パーソナリティーの方は約70人です。私の足りないところ、たくさんありますが、スタッフや市民パーソナリティーの皆さんに助けられて今があるのだと感謝しています。

これから

Airてっしは、新名寄市の誕生と同時に青年会議所OBの皆さんを中心に市民有志が立ち上げた民営のローカル局で、2016年3月に10周年を迎えます。中継などで街に出た際に「聞いているよ」と声を掛けてもらえることが増えましたし、エフエムなよろが認知されていることを実感します。私が入局した頃の頃に声を録音した小学生たちが、いま高校生パーソナリティーを務めてくれるなど、感慨深いものがあります。これからも誰もが気軽に参加できて、身近な情報が聴ける、地域の皆さんにとって敷居の低い放送局であり続けたいと思います。

北の★女性たちへの
メッセージ

ボランティア時代から担当している私の番組名は「おそぎの花」です。いくつになっても自分の「やりたいな」という思いを形にすることはできます。「私は何もできないわ」と言うあなたも、実はすごいエネルギーを秘めていると思います。やってみましょう!

上川【士別市】

たつみ 辰巳 美恵さん めん羊工芸館くるるん 代表

1943年生まれ、士別市出身。士別高校を卒業し、消防職員の夫と結婚。3人の娘に恵まれる。1982年の「サフォーク研究会」の立ち上げ時のメンバーで2009年から1期会長を務める。2009年には、めん羊牧場がある「羊と雲の丘」に「めん羊工芸館くるるん」を開設。木製の糸車や織機などを設け、手づくりの羊毛製品の製作指導にあたる。



毛糸と時を紡いで技術の伝承を

きっかけ

幼いころに母親から編み物を教えてもらいました。長女だったので、冬になると弟たちの靴下や手袋を毛糸で編んでいました。1970年代になると、士別市が直営で羊の放牧場を開設。食用サフォークを観光資源にする研究が始まりました。そんな中、青年が中心となり、1982年に町おこし団体「サフォーク研究会」を設立。私は手芸が得意だったので、春に牧場で刈る羊毛を使ってマフラーを作れないかと考え、翌年に同研究会の部会として、羊毛加工グループ「くるるん会」を立ち上げました。

苦勞

士別市は羊・サフォークのまちとして、認知度が高まってきましたが、そこに至るまでさまざまな努力がありました。くるるん会では、牧場で刈り取った羊毛を洗浄、染色し、毛糸玉にするまで、多くの方に協力を頂いて試行錯誤を重ねてきました。さらに毛織り技術の向上を図るため、自ら東京の専門学校で講習を受け、士別市に戻って仲間に指導しました。札幌市のデパートでの展示販売会では、羊毛製品の素晴らしさを紹介したり、多くの方に工芸体験をしてもらえるよう、根気強くPRを重ねていきました。

満足度

2014年は羊年だったので、行政と市内の商工団体が集まって「サフォークランド士別プロジェクト」と称した各種イベントを開催しました。2015年11月15日には、市民ら約330人が集まり、くるるん会員の作品を着用した「ニットファッションショー」を開催。地元の高校生がモデルになるなど大盛況でした。近年、夏になると、東京都など首都圏から道北の周遊観光の1つとして、工芸館に立ち寄り手芸体験をされます。さらに外国人観光客も訪れるようになるなど、今後の展開が楽しみになってきました。

これから

少子高齢化社会を迎え、士別市も高齢者が多くなってきました。この工芸館は、そんな高齢者の方々が気軽に集まれるような空間にしたいと思っています。毛糸玉を触っていると、自然と心が安らぎ、会話が弾んできます。さらに工芸館内にある木製の糸車や織機などが簡単に使えるよう、技術の伝承を図り、もっと若い世代に毛糸の紡ぎ方を教えていきたいです。小中学校の研修旅行の一環として、工芸館に立ち寄りてもらえるよう、地元の観光協会などと連携しながら集客に努めていきます。

北の★女性たちへの
メッセージ

手づくりのマフラーを大事な人に渡したことはありますか？昔と違って、若い女性が編み物をする機会が少なくなっています。1度でも時間をかけて、毛糸玉から編んでみてください。完成した時の達成感は最高ですよ。若いお母さんも子どもに手袋や靴下を編んであげると、あなたの愛情はきっと子どもに届きますから。

上川【下川町】

たなべ まりえ
田邊 真理恵さん 株式会社フプの森 代表取締役

1976年生まれ、千歳市出身。北大経済学部卒。札幌市で、花屋、WEB販売の会社勤務を経て、2007年に下川町に移住。2012年に下川町森林組合のトドマツ精油事業を、移管されていたNPO法人から引き継ぎ、株式会社化。2015年末に新ブランド「NALUQ (ナルーク)」をリリースした。



リアルに森のある生活を伝えたい

きっかけ

大学時代から、森林関係の仕事に憧れていましたが、「きこり」が「研究者」しか知りませんでした。二十代後半になり本格的に動き始め、森や環境保全に関係する展示会などに行き、企業や団体の方に話を聞いて回り、企業にはメールを出し、とっかかりを探しました。下川町が森林の先進地区だと知ったのは、東京都のNGOの方から聞いたからです。早速、下川町森林組合を見学して、一ファンとして応援しようと思っていましたが、精油事業担当者が辞めるのをきっかけに下川町に移住し、私が担当者になりました。

苦労

地方で何かいい素材があっても、それを事業として継続するのは「難しいことだなあ」と考えています。素材はいいモノだけど、需要が多いものではありませんので、どうやって事業を展開していくか、常にみんなで考えています。会社にしたのは、シンプルに製品を製造する体制でコンセプトを明確にしたかったからです。現在の事務所や蒸留施設は、森林組合時代から使っていたものをそのまま使わせてもらっています。恵まれています、独立し頼れる本体組織がなくなった分、資金面でのやりくりも頑張らなきゃいけないと思っています。

満足度

森に関する仕事に就けたという点では、満足度100パーセントです。本当は、工房ももっと山の中にありたいですし、会社としてもまだまだ道半ばですから、株式会社フプの森の満足度は60パーセント位でしょうか。山の中では製品づくりだけでなく、おもてなしも出来たらと思います。私たちは創業時から、商品を作るだけでなく、森の手入れをどうやっているのか、森を身近に感じる生活とはどういうものなのかを伝えたいという使命感から始まっています。そういう面での発信力もつけていきたいですね。

これから

「リアルに森のある生活を伝えたい」と思っています。今は、林業と多くの方の生活は分断されていて、森林の保全やそれに携わっている方々の姿があまり見えません。もっと気軽に森に行けたり、森から生まれたモノが身近に感じられるよう、頑張りたいです。一昨年、自分たちで1.5ヘクタールの山を買いました。ここをフィールドにして、蒸留体験などを行うことを考えています。将来的には、商品を見てもらえるような小屋を作ったり、森の中での活動を増やしたいですね。新ブランド「NALUQ (ナルーク)」は、より多くの方に広がればと期待しています。

北の★女性たちへの
メッセージ

やりたいことがあるなら、その中に飛び込んでみるのが一番。まずは動いてみることで。怖がらないで声を掛けてみるというのが、とっかかりになります。一回で掘もうとせずに、辿っていけば誰かが教えてくれますよ。

び・ふらねっと ～農家・デザイナーグループ～

それぞれが暮らす美瑛町の「び」と富良野市の「ふら」を取って名付けた。メンバーの井川公子さん(1953年生まれ/美瑛町)、菅野三津子さん(1958年生まれ/美瑛町)、竹内紀代子さん(1956年生まれ/富良野市)は、それぞれの営農スタイルに応じた作品を提供する。



メンバーの井川さん(左)、竹内さん(中央)、菅野さん(右)



ビューティフル4Kで農業を元気に

きっかけ

3人とも元々裁縫が好きで、近所の方に作ったり、エプロンや洋服をカフェで委託販売していました。2008年、美瑛町で開かれた「フィールド(農作業着)ファッションショー」への参加がきっかけで3人が出会いました。「このまま終わってしまうのはもったいない」と、知人の勧めもあり、内閣府の六次産業化プロジェクトの支援を受け「び・ふらねっと」をブランドとして立ち上げました。毎年、旭川市で展示会を開き、ファッションショーの依頼もあります。機能性に加え「きれい」「かわいい」「かっこいい」の“ビューティフル4K”がコンセプトです。

苦勞

それぞれの自宅で、時間の取れる時にアイデアを絞り、作品を作っています。みんな、営農スタイルが違いますが、農業の繁忙期に入ってから注文は、お客様に少し待ってもらうことは多々あります。製作は主に、農業が一段落し、時間のとれる冬に集中的に行っています。家族に迷惑を掛けたくない心配りしながら、1に農業、2に主婦業、3でやっと製作です。将来、注文が増えれば部分的な外注も考えられますが、現在は個々人の全くの手作りです。本業と主婦業、製作のやりくりには、やはり苦慮しています。

満足度

3人が農家に嫁いで30年ほど経ちました。当時の農作業着は地味で同じ型の物ばかり…。選びようもなく、仕方なくという思いで着ていました。「び・ふらねっと」の作業服は、3人3様の「あったらいいな」を形にしたものです。竹内さんはハウス作業が多いため「暑さ対策」。井川さんは外の作業が多く、訪問客も多いため「日よけ対策と携帯電話・スマホの収納」、菅野さんは機械作業が多く、「作業の邪魔にならない」が出発点です。女性はいくつになってもかわいいものが好き。この服を着て楽しく仕事ができる女性が増えてくれれば、と思っています。

これから

今は、ネットからの注文や展示会用の製作をこなすのに精一杯ですが、将来的には、農作業着といえば「び・ふらねっと」と言われるようになれるといいな、というのが3人の想いです。今は、それぞれの営農経験からデザインをひねり出していますが、例えば、酪農の方にも使ってもらえる作業着も作ってみたい、と思っています。最近は、農業に関わらず、ガーデニングやウォーキング用のオーダーが増えています。需要の広がりと思っていますが、デザインの一層の充実が課題ですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

「かっこかわいいスタイルで仕事ができる!」。若い方も憧れる農業を目指し、後継者や嫁不足の解消ができればいいと思っています。食を支える農業は、とても大切な仕事です。3人3様の苦勞があったからこそ生まれた「4K作業着」から、農業を変えていければと思います。

上川【東川町】

みやたけ ますみ
宮竹 眞澄さん 人形作家

1949年生まれ、大分県宇佐市出身。福岡県福岡市の調理師専門学校を卒業後上京し、沖電気の社員寮の調理師となる。1973年に結婚し退社。これまでに70回を超える展示会を夫の博信さんとともに開催してきた。今は旭川市東旭川地区で仮住まい。



過ぎ去りし良き時代の優しさと暖かさを笑顔で

きっかけ

幼いころから「作ること」が好きでした。人形創作を始めたのは29歳の時。「人形を作ってみようか」と人形創作の本を買ってきました。趣味の範囲でその後も続けてきましたが、人形作家を「職」としてスタートさせたのは1991年に東川町に移住し、子育ても終わった2008年のこと。東川町への移住は、豊かな自然の中で暮らしたい、という夫の決断です。このまちに住む方々の暮らしや表情を観察し、こつこつと人形を作っていたのですが、夫から「どうせやるなら職業としてやってみたら」という一言が踏み出すきっかけになりました。

苦勞

1つの作品の創作には1か月から2か月ほどかかります。頭の中で「ああかなあ、こうかなあ」と、何日も構図を考え、表情やしぐさは作業をしながら作り上げていきます。教室に通ったことはありません。自分の世界で自分の人形を作りたかったからです。好きなことをやっているのだから苦勞とは感じません。あるとすれば、道外の展示会の際の周知ですね。地縁も血縁もない場所での開催なので、夫とともにマスコミを訪れ、紹介していただけるようお願いします。幸い、ほとんどの方が協力してくれます。ありがたいですね。

満足度

今の活動範囲は道外にまで広がっています。移動の時は、運転する夫の隣で風景を眺め、そこのいる方々の表情を観察し作品に活かします。今も続けている「心のふる里人形展」は、2008年から始めました。忘れかけている田舎の生活にあった喜びや笑顔を人形を通して伝えたい、残しておきたい、という思いがあります。展示会を訪れた方々の中には、昔を思い出し、私の手を握って「初めてあなたに話すことができました。ありがとう」と泣きながら話した方もいます。人形を見た方に少しでも笑顔と元気を与えているのかな、と思うと嬉しいですね。

これから

いろんな土地に行きたくて多くの方に出会うことが何よりも楽しいです。開催期間中はずっと会場にいて、訪れた方と会話をします。作品のヒントもこうした方たちからいただくこともあります。元気でいる限りは展示会を開催したいですね。常設の展示施設があったら良いのに、という方もいます。いつかはそうした施設も持ちたいな、とは思っていますが、まだ当分は今の活動を続けたいですね。「あんな年でも元気にやっているんだ」と、元気を与えることができれば、と思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

チャンスだと思えば結果をおそれずに飛び込むべきです。やめることはいつでもできますから。困難にぶつかっても、やり続けようという意志と努力があれば、必ず手を差し伸べてくれる方が出てきます。前向きに行動すれば結果オーライですよ。

上川【幌加内町】

みやはら みつえ
宮原 光恵さん Mt.ピッシリ森の国 農業・写真家

1962年生まれ、標茶町出身。写真スタジオのアシスタントを経てフリーランスに。アラスカの自然と野生動物をライフワークに取材を続けていた際、現在の夫・克弘さんと出会い、1990年に結婚。1995年に家族で幌加内町朱鞠内地区に移住。1997年から就農開始。



朱鞠内の苛烈さと豊穡さを抱きしめて

きっかけ

人間としてどう生きるべきかを追求していた夫とアラスカで出会い、狩猟採集を基本とした冬の生活技術と犬ぞりを学ぶためアラスカネイティブ社会を経験、自然と共に暮らす生活の場を母国で、との思いから道内のいくつかの土地を訪れ、選んだのは幌加内町朱鞠内地区。険しすぎない広大な森と多様な動植物、広い湖とそこに生息する魚たち、雪が多く、夏冬の寒暖差は日本でも有数の地。これらすべてがすばらしい。一目でここだ！と思い、その足で幌加内町役場に行き「朱鞠内で農業をやります」と告げました。20年前のことです。

苦労

私たちの就農した農地は、とても痩せた土地でした。1年目の春、トマトの苗を植えましたが、1か月たっても「じっ」としているんです。秋に実が一つだけつきましたが、赤くならないまま霜にやられました。毎年EM菌と堆肥などを使い、時間はかかりましたがいい土になってゆきました。2008年のそばの大暴落は最大のピンチでした。農地を拡大し、機械も購入したばかり。「私達はこれでおしまい」と泣いていると、夫の携帯が鳴りました。以前営業に行った首都圏の高級食料店・成城石井さんからでした。「すばらしい、ぜひ納品を」と声がかかりました。本当に色々なことがありましたね。

満足度

私も夫も農業は未経験。でも若かったから意欲満々でした。5歳の娘と4歳の息子の子育て、20ヘクタールの農地でジャガイモやそばを育てる休みのない作業、今になれば、よくこんな無謀なことを、と思いますが、毎日が充実していましたね。自分たちの好きなことをすばらしい大地でできることの喜びを家族で実感しました。ただ苦労して耕作するだけの生活ではなく「生きている」と「命」を味わいながらの生活でした。経営が大変な時も誰かが手を差し伸べてくれました。夫婦だけではここまで来ることはできませんでした。多くの友人たちに心から感謝ですね。

これから

子どもたちは今、24歳と23歳です。後を継ぐかどうかは分かりません。農家と農業は好きだと思いますが、朱鞠内地区という地域のコミュニティ自体が維持できるのか、という状況ですから。この地域は、入植当時の農家は4戸から今は2戸です。もし1戸になると、100ヘクタール以上の農地を我が家が維持することは難しい。人が住み続けるためには仕事と雇用が不可欠です。そのためにも、農産物の加工販売など、付加価値をつける体制を作り、雇用を生み出すことが必要です。その取り組みを進めるために、2016年は農業生産法人化と農商工連携を考えています。

北の★女性たちへの
メッセージ

農業には女性だからこそできることがたくさんあります。その方の特技や才能を生かせる仕事です。勇気と希望を持って飛び込んできてほしい。経験がなくても大丈夫。私もそうでした。マイナスに考えて良いことはありませんよ。いつも前向きに、プラスに考えると道は開けますから。

上川【上富良野町】

やすまる ちか
安丸 千加さん 農業女子ネットワーク はらぺ娘 代表

1986年生まれ、上富良野町出身。2007年に北海道立農業大学校を卒業後、メロン農家である実家で就農。2012年に管内の女性農業後継者を中心とした「ふら農嬢（ふらのっこ）」を立ち上げ、その後「はらぺ娘」の設立を進め、代表に就く。



跡取り娘たちの熱い思いが北海道の農業を元気に！

きっかけ

農業は大好き。継ぐことにも迷いはありませんでしたが、大学を卒業して両親と農業を始めると、知らないことばかり。農家を継ぐという女性が周りにいてくれたらすごく助かるし、楽しいな、と感じました。でも女性後継者の組織はありません。婦人部ともちょっと違うし。だったら自分たちで作ってみよう、と思いました。北海道農業公社が開催した研修会で知り合った仲間らとともに、2013年12月に全道各地の25人で「はらぺ娘」を立ち上げました。年齢層は20歳代から30歳代が中心。独身から既婚者までさまざまです。

苦勞

農業はまだまだ男性社会ですね。跡継ぎになる娘も「嫁に行かず家を手伝っている」と見られがち。メディアにも登場しましたが、地域で理解が十分に深まったかというと、どうかなって思います。活動が尻すぼみになってしまうと「やっぱりね」という声も出るでしょうから、それなりにプレッシャーを感じています。シンポジウムに出ても「女性の視点からの話を」など、女性ばかりが強調されることが多いですね。好きでやっているのだから特別に見ないで、と思うこともたびたびあります。

満足度

「悩みを分かち合い、楽しく元気に農業を」が「はらぺ娘」の活動方針です。2014年12月には「シンデレラパーティー」という婚活を企画しました。農家の跡取り娘が夫を、というのは珍しかったようで、結構話題になりました。「はらぺ娘」のPRになったのはありがたかったのですが、「はらぺ娘」＝「夫探し」のように受け止める方もいて、ちょっとね、という感じです。みんなが一堂に会するのは年に一度の総会程度ですが、仲間同士で連絡を取り合い、愚痴をこぼしたり励ましたりなど、楽しくやっています。

これから

発足して3年目を迎え、会員も35人に増えました。活動の手応えとともに、会員の温度差も感じます。2015年に入ってから、道北、道東、そして道央・道南の3つのブロックに分け、それぞれのリーダーが中心になって活動をすることにしました。門戸は広く開けています。「はらぺ娘」に入って、地域のリーダー的な存在になってくれればいいなあ。3年ぐらいが節目かな、と思っていましたが、今はすっかり「はらぺ娘」にはまっています。

北の★女性たちへの
メッセージ

地域と農業を元気にしたい、という思いで活動しています。農業に限らずさまざま仕事で女性を特別視する風潮は根強いですが、理解して協力してくれる方もたくさんいます。明るく楽しくがんばりましょう！



旭川医科大学 復職・子育て・介護支援センター「二輪草センター」

2007年10月の開設以降、託児システムや研修制度などを構築し、女性職員の復職支援を展開。開設前の企画段階から関わった旭川医大皮膚科学講座教授の山本明美さんが、2013年4月からセンター長を務める。2014年1月に北海道男女平等参画チャレンジ賞を受賞。



大地にしっかりと根を張る野花のように共同参画の和を

きっかけ

医師・看護師不足と、それに伴う地域医療の崩壊という深刻な課題の解決策として、女性の復職支援に取り組む「二輪草センター」を立案しました。2007年10月に開設し、旭川医科大学と附属病院の職員を対象に、病児・病後児保育、学童保育サポートなどを展開しています。シンボルの「二輪草」は、春に白い花が1本の茎から2輪咲く多年草。どこにでも咲いている野草ですが、大地にしっかりと根を張るように、男女共同参画社会が地域に広がるようお願いを込めて名付けました。

苦勞

開設前から、組織全体で医師不足という課題を共有し、協力し合って一つの方向に進んで来られたのでこれといった苦勞はありませんでした。しいて挙げるとすれば、現在職員向けに、子育てや介護を経験した職員が講師を務めるセミナーなどを開催しているのですが、参加者を集めるのが大変です。仕事が落ち着く夕方に設定すると子育て中の職員の帰宅時間と重なり、ランチタイムはシフト制の看護師らは参加しやすいのですが、医師は診察時間のため難しく、試行錯誤しています。

満足度

センター発足以降、女性の職員や幹部職員が増えました。組織としての満足度は100パーセントですが、センター長としては90パーセントでしょうか。子育て以外にも、親の介護や不妊治療など支援の必要な部分はあります。子育て世代が比較的若い職員なのに対し、介護世代は経験を積んだ幹部職員が多く、代わりの効かない職員が抜けた穴をどう埋めるかも現場の課題。不妊治療は公にしにくいデリケートな問題なので、普通の病気で通院するのと同じように、直属の上司に話せるような環境を作り上げることが必要です。

これから

まだ行き届いていない、介護と妊活の支援に取り組めます。センターの事業を継続してくれる後継者の育成も、重要な課題です。将来、ワークライフバランスの考え方が定着していれば、センター自体が要らなくなっているかもしれません…が、ちょっとまだ先の話かと思います。我々センタースタッフも、つい長時間労働をしまい、周囲にプレッシャーを与えてしまっていたかもしれません。上手にワークシェアをすることが、勤務時間の改善と人材育成の双方につながると思います。

北の★女性たちへの
メッセージ

今は、日本全体が女性に「もっと活躍しよう」と働きかけている時代。女性たちが能力を生かして、仕事ができる絶好のチャンスです。この機会にぜひ、自分の能力を生かせる場所を探して、チャレンジしてみてください。

留萌【苫前町】

いとろ まちこさん 北海道指導農業士協会 理事

1964年生まれ、苫前町出身。農協職員だった27歳の時、夫の克司さんと結婚。負債農家だった牧場を、財務経理の経験を生かして立て直す。町内の酪農女性グループ「モーモーみるく倶楽部」代表や、2001年の「留萌管内農村女性ネットワーク“オロロン”」の立ち上げにも参画する。3女の母。



ドアを開け、外に出て、女性という「個性」発揮を

きっかけ

1998年に、自分が経験してきたパートナーシップ型経営を全国酪農青年婦人会議で発表しました。これがきっかけで、さまざまな方から声がかかってくるようになり、2006年には指導農業士にも選ばれました。外に出て行くことで、さまざまな刺激や出会いがあり、それが縁でさらに輪が広がっていきました。道外の方とお話をしていると、いつも北海道の「食」のすばらしさを話してくれます。地元だけにいるとなかなか気付かない北海道、農業、酪農そして苫前町の良さが自信となって、さらに前進、となりました。

苦労

結婚する前は農協で経理や財務を担当していたので、結婚相手の財務状況は知っていました。「ここに嫁ぐ人は大変だなー」と思っていたのですが、こうなったのは「勢い」ですね。牧場の負債はそれほど気になりませんでした。財務と経理の経験を生かせば何とかなる、と思いましたから。苦労したのは育児と酪農という仕事です。すべて初めての経験で、本当に忙しくて時間に追われる毎日でした。ある時期は24時間夫と交代で働いたこともあります。でも、何とかあったのは「手抜き」のおかげかもしれませんね。

満足度

自分から進んで先に立って、という気持ちはありませんでしたが、行動していて、ふと後ろを見るとそうになっていた、という感じですね。大事にしたのは「無理をしない、させない」ことです。年齢や生活環境が異なる女性の集まりですから、どうしても個人差が出ます。「継続は力なり」を信条に「手抜き上手」をうまく使い分けてきたので続いたのかな、と思っています。外に出て行くことは、良い意味での刺激となります。でも一人ではなかなか難しい。みんなが集まればそれが可能で、参加した方々が元気と自信を持つことができたのでは、と考えています。

これから

2015年に町議会議員に選ばれました。女性議員は初めてです。まずは町の審議会や委員会などの女性の登用率を高めることを求めています。女性には一本気な行動力があります。もっと多くの場面で女性が意見を発信できるようになれば、間違いなく町の活性化につながると思います。議員という立場を活かして、女性の「のびしろ」を具体化するために行動します。酪農家としては、TPPが課題です。今後は外国だけではなく地域間の競争が激しくなると思います。「苫前カラー」をつくり上げるためには、女性の存在が不可欠だと思います。

北の★女性たちへのメッセージ

私は外に出る前、自分の仕事に誇りが持てませんでした。3K（汚い・苦しい・危険）ですから。でも、外に出ることで、大切な「食」に携わる自分の仕事と、ふるさと・苫前町に誇りと自信を持つことができました。女性であるということは「個性」です。ドアを開け、外に出て「個性」を発揮しましょう！

留萌【留萌市】

たなか かずこ
田中 和子さん 株式会社丸夕田中青果 代表取締役

1937年生まれ、増毛町出身。1955年に、留萌市で青果店を営む夫の常男さんに嫁ぐ。看板商品の「やん衆にしん漬け」は、独自の製法でにしんと野菜の旨みを逃すことなく凝縮し、道内を始め道外の物産展でも絶大な人気を集める感動の一品。



母から伝承されたふるさとの味を笑顔で提供

きっかけ

18歳の時に増毛町から嫁いできました。「果物が好きなのでいいかな」ぐらいの気持ちでしたが、商売なんて全く知りません。当時は野菜や果物を入れたかごを背負って、近所に御用聞きに行き、車に乗って遠くは稚内市まで行きました。にしん漬けは、40年ほど前から始めました。私の母・ハマが地元では漬物名人と呼ばれていて「漬物をやりなさい、絶対に売れるから」と言われたことがきっかけです。夫の常男が母の元で修行し、販売を始めました。今では店の主力商品です。母の味が皆さんに喜ばれることは、娘として何よりも嬉しいですね。

苦勞

若いころはとにかく忙しかったですよ。休みは正月とお産の時だけ。寒い中、リンゴを売っていると手があかぎれになって痛くて。でもね、お客さんの所に行くと「ああ、田中さんのお嫁さんかい、よく来たね。暖まっていきなさい」と歓迎してくれます。あかぎれの手を見て「かわいそうに。この薬を使いなさい」と手を握ってくれました。本当に心の温かい方が多く、どの方も優しい言葉をかけてくれました。慣れない仕事で不安だらけだったけど、たくさんの人に支えられ励まされてきました。感謝の気持ちで一杯です。

満足度

1998年に夫が亡くなりました。市議を3期務め、町内会の会長も18年間続けるなど、公私ともに忙しい人でした。人とにぎやかに過ごすことが好きな人で、飲みに行くといつも誰かを連れて帰ってきましたね。病気になって亡くなる時に「本当に苦勞をかけたな、すまん」と言いましたけど、私は幸せでしたよ。2007年に建てた今の社屋を見せてあげることが出来なかったのは残念ですが、息子の考えで、少しでも駅前が賑わうように、と屋上を住民の方に開放して楽しく過ごしていただいています。夫も天国からそれを眺めて喜んでいるでしょう。

これから

今の店は長女が花と果物、長男が漬物を担当しています。それぞれ夫と妻がいて、孫も4人になりました。長男の嫁は世界一の嫁ですよ。彼女が作ったピクルスは、北海道が主催する「北のハイグレード食品+2014」にも選ばれました。ニシン漬けと並ぶ看板商品です。家族がみんなで店を盛り立ててくれます。私もまもなく80歳。最後の願いは古くなった漬物工場を新しくすること。これが完成したら、にっこりと笑って悔いなく人生を終えることができそうです。あと少しがんばってみますね。

北の★女性たちへのメッセージ

生きていれば苦しい時やつらいことがあるでしょう。でも、暗い顔ばかりしてはだめ。せっかくの幸せが逃げてしまうから。にっこりと笑顔を見せて、人に優しくしていれば、幸せは必ず自分に返ってきますよ。苦勞は決して無駄にはならないからね。

宗谷【豊富町】

どうわき 堂脇 さとみ 聖美さん 餅cafe & stay わが家 経営

1974年生まれ、旭川市出身。幼い頃からアトピー性皮膚炎を患い、2009年に湯治治療で豊富町に移住。2011年に自宅兼店舗「餅cafe & stay わが家」を開業。移住仲間で「豊富温泉もりあげ隊」を作り、活動中。



豊富町への感謝が原動力。親子湯治をサポートしたい

きっかけ

生まれた頃から20数年以上、アトピー性皮膚炎を患い、出産後の30歳前半で、最も重篤な状態になりました。「服を身につけることすら辛い」。そんな中で、1歳半の子どもも発症。以前、偶然訪れ、私の病状に効果のあった豊富温泉に親子で移住を決めました。「生きるために行くしかない」。選択肢はありませんでした。乳飲み子と二人、豊富町でアパートを借り、湯治生活を始め、3か月程で二人の症状が回復しました。それを機に「湯治に訪れる方をサポートしたい」と、カフェを始めたのがきっかけです。

苦労

自分が出来ることを、できる範囲でやってきました。店舗は、2年前に他界した実父と二人で“日曜大工”レベルのやり方で手を加えたもので、いわゆる開業資金は10数万円でした。湯治客だけではなく、地元の方にも来ていただきたいと思っていましたが、そうなるまでは開業から一年はかかりました。今の私のベースは、あくまでも子育てです。子どもの発熱や冬の雪かき、まき割りなど、日常の雑務が増えると休業することもあります。そこは無理をせず、自分のペースで進めています。

満足度

今、取り組んでいることは、私が6年前に豊富町に来た頃に「あったらいいな」と思っていたことです。カフェの運営で、長期湯治に来ている方だけではなく、地域との繋がりも増えました。2015年3月には、「長期療養者の負担を軽くできれば」と女性専用シェアハウスを始めました。移住当時から全く想像できない姿です。夢は、親子湯治の全面サポートと、湯治に来る子どものホームステイ受け入れです。施設の整備や人的問題などがありますが、夢の実現まで50パーセントぐらいの地点まで来ているのかもしれない。

これから

豊富町のように、こんなに人に感謝されている町はありません。感謝の度合いも「命を救われた」というレベルの深いものです。この町で普通の生活と人生を取り戻しました。私のように、幼い頃から皮膚疾患で苦しむ子どもを、早い段階で救ってあげたい。そうすることで、子どもたちの人生は大きく変わります。シェアハウス滞在者や地元には、専門スキルを持っている方が数多くいます。「わが家」が、その方たちの活動拠点となり、療養者の豊富町への移住、自立支援の足掛かりになればと思っています。

北の★女性たちへのメッセージ

「生きることは繋ぐこと」。そう思って活動しています。人は、存在しているだけで生命を受け継ぎ、いのちを繋いでいます。人それぞれの歩幅があり、感じ方があり、幸せがあります。頑張りすぎず、そのままの自分で出来ることがたくさんある、そう実感しながら日々歩んでいます。

1973年生まれ、稚内市出身。北海道女子短期大学(現・北翔大学短期大学部)保健体育科を卒業後、1996年から稚内市の体育施設「水夢館」にスポーツインストラクターとして勤務する傍ら、2012年に宗谷ご当地体操、2014年に利尻富士町健康体操をプロデュース。現在は独立し、宗谷管内各地で運動指導員として活躍中。



「前より楽になったよ」の一言が一番の喜び

きっかけ

体育の先生を目指し、北海道女子短期大学(現・北翔大学短期大学部)で学んでいたのですが、卒業時に故郷・稚内市の体育施設「水夢館」でオープニングスタッフを募集していたのを見つけ、地元に戻ってスポーツインストラクターになりました。18年間勤務していたのですが、宗谷管内に運動を指導できる人材が不足しており、離島を含む9町村に出張して指導していた状況でした。指導員がいなくても、住民が気軽に運動に取り組み、継続した健康づくりができないかと考え、国の助成金を活用して「宗谷ご当地体操」をプロデュースし、DVD化しました。

苦勞

DVDの作成時は、さまざまな場所で披露し、メディアを通じて話題にはなりましたが、DVDを率先して利用してくれる人材を育成しなかったため、大きな広がりを作ることができませんでした。DVDや健康体操というのは、あくまでツールです。このツールを利用する方のために、ツールを使える人が必要になります。地域が高齢化、過疎化していく中で、誰もが手軽に、継続的に運動するために、ツールの作成だけでなく、人材の育成との両輪で取り組んでいくことが大切だと実感しました。

満足度

最終的な目標は、地域に健康づくりの仕組みをつくることです。DVD作成から2年後、今度は利尻富士町で健康体操をプロデュースしました。利尻富士町では、体操の振り付けを考えるだけでなく、講座を通じて健康体操の特徴を学び、住民たちに教えることができるリーダーを育成するため、健康体操マイスター制度という仕組みづくりにも行政とともに取り組みました。利尻富士町での取り組みをモデル事業として位置付けて、ほかの管内市町村でも自発的に運動ができるような環境づくりのお手伝いをしていきたいですね。

これから

さまざまな場所で健康指導をしていく中で、健康づくりは地域づくりだと感じました。人は、心と体が健康でなくては、前向きに生きていくことができません。また、人というのは、地域にとって細胞の一つ。元気で前向きな人、つまり健康な人が多くいる町は、逆境に負けない、明るい元気な町になるな、と。とはいえ、実は私にとっての一番の喜びは「前より楽になったよ」「旅行を楽しめるようになったよ」という言葉。これからも、一人一人の健康づくりを支えることで、少しでも地域の活性化につながっていけばいいな、と思っています。

北の★女性たちへの メッセージ

夢をかなえるために必要なものは、楽しむこと、わくわくすること、そして仲間との出会いです。仲間と夢を語り合い、心の中に楽しい気持ちがあふれた時、最初の一步が踏み出せるはず。楽しい気持ちと夢を応援してくれる仲間との縁を大切に！